

上野尼御前御返事

弘安四年一月一三日 六〇歳

すみざげ 筒 提子 むしもち あめ 桶 こうじ 籠  
 聖人ひとつ、ひさげ十か、十字百、飴ひとをけ二升か、柑子ひとこ、串柿十くしな  
 らびにくり給び候ひ了んぬ。春のはじめ、御喜び花のごとくひらけ、月のごとくみたせ  
 給ふべきよしうけ給はり了んぬ。

抑 故五郎殿もいかでかかへらせ給はざるべき。あわれ無常の花とくさとの  
 草 萌 草 帰 草  
 抑 故五郎殿もいかでかかへらせ給はざるべき。あわれ無常の花とくさとの  
 のやうならば、人丸にはあらずとも花のもともはなれじ。いばうるこまにあらずとも、  
 草のもとをばよもさらじ。

経文には子をばかたきととかれて候。それもゆわれ候か。梟と申すとりは母をくら  
 う。破鏡と申すけだものは父をがいます。あんろく山と申せし人は師史明と申す子にころ  
 されぬ。義朝と申せしつはものは為義と申すちをころす。子はかたきと申す経文ゆわ  
 れて候。又子は財と申す経文あり。妙莊嚴王は一期の後無間大城と申す地獄へ墮ち  
 させ給ふべかりしが、浄蔵と申せし太子にすくわれて、大地獄の苦をまぬかれさせ給ふ  
 のみならず、沙羅樹王仏と申す仏とならせ給ふ。生提女と申せし女人は、慳貪のとが  
 によりて餓鬼道に墮ちて候ひしが、目連と申す子にたすけられて餓鬼道を出で候ひぬ。さ  
 れば子を財と申す経文たがう事なし。

故五郎殿はとし十六歳、心ね、みめかたち人にすぐれて候ひし上、男ののうそなわり  
 て万人にほめられ候ひしのみならず、をやの心に随ふこと水のうつわものにしたがい、  
 かげの身にしたがうがごとし。いへにてははしらとたのみ、道にてはつへとをもいき。  
 はこのたからもこの子のため、つかう所従もこれがため、我しなばになわれてのぼへゆ  
 きなん、のちのあとをもちをく事なしとふかくをぼしめしたりしに、いやなくさきにた  
 ちぬれば、いかにやいかにやゆめかまぼろしか、さめなんさめなんともへども、  
 さめずしてとしも又かへりぬ。いつとまつべしともをぼへず。ゆきあうべきところだに  
 も申しをきたらば、はねなくとも天へものぼりなん。ふねなくとももろこしへもわたり  
 なん。大地のそこにありときかば、いかでか地をもほらざるべきとをぼしめすらむ。

やすやすとあわせ給ふべき事候。釈迦仏を御使ひとして、りやうぜん浄土へまいりあ  
 わせ給へ、若有聞法者無一不成仏と申して、大地はさばはづるとも、日月は地に墮  
 ち給ふとも、しをはみちひぬ世はありとも、花はなつにならずとも、南無妙法蓮華経と  
 申す女人の、をもう子にあわずという事はなしととかれて候ぞ。いそぎいそぎつとめさ  
 せ給へつとめさせ給へ。恐々謹言。

正月十三日

日 蓮 花 押

上野尼御前御返事